

# 長崎方言による共通語助詞ガの分析

前 田 昭 彦

1. はじめに
2. 日本語教育の多様性
  - 2.1. 外国人が直面する多様な日本語
  - 2.2. 言語教育に関する俗信
3. 日本語教育と文法
4. 日本語教育と方言
  - 4.1. 外国人学習者と方言学習
  - 4.2. 方言と共通語
5. 長崎方言の現況
  - 5.1. 発音
  - 5.2. 文法
6. 長崎方言における主格助詞の分布
7. 長崎方言における敬意表現と助詞ガ、ノ
8. 主格助詞ガとノ
9. いわゆる対象語・目的語提示のガ
  - 9.1. 研究史概観
  - 9.2. 長崎方言における対格助詞バの分布
  - 9.3. 共通語助詞ガの長崎方言による置換テスト
  - 9.4. 長崎方言ノ、バ置換が示唆するもの
10. 共通語助詞ガの機能
11. おわりに

## 1. はじめに

方言は国内の学校教育においてはおざなりに扱われ、外国人にたいする日本語教育においてもほとんど顧みられることがなかった。さらに、最近では映像・活字メディアの普及と学校における共通語教育が方言そのものの駆逐に相乗効果を発揮していると言われている。方言学者の中には、日本におけ

る方言学の未来を悲観する人もいる。しかし、皮肉なことに、共通語をかなりの程度身に付けた外国人が、日本人とのコミュニケーションを阻害する要因としてまず第一に方言をあげる場合が多い。方言は健在なのである。

日本語教育と方言の関わりには、まず、外国人への方言教育の問題がある。その際、日本人を対象とした学校文法や国語教育が日本語教育にほとんど有効でなかったと同様に、従来の方言学による方言の意味・用法の分析がさほど効力を発揮できない場面が予想される。かつて、日本語教育の隆盛にともない、言語学の新たな知見をとり入れた日本語学によって、日本語の分析に新たな地平が拓かれたように、外国語としての方言教育が行われるようになると、方言の分析にも新しい世界が開かれるものと考えられる。

また、これまで共通語と方言の文法の違いとして片付けられてきた方言のある種の表現が、共通語の分析に有効な役割を果たしうる可能性もある。現在多くの人が方言と共通語の二重の言語生活を営んでいる。日本語を母語とする日本人として、同一人物が共通語を使用するときと、方言を使用するときで事象の認知に違いがあるとは考えられない。例えば、方言と共通語で使用する助詞が違っているとしても、文法の異なる外国語ではなく同じ日本語を話しているのだから、文中のある要素を方言で話すときは主格として認識し、共通語を話すときは対格と認識して話すことなどあろうはずもない。そこに共通語の分析に方言が利用できる可能性が生じてくる。

そのようなもののなかに、従来、主語ないし主格をマークすると言われてきた助詞ガと方言の対応がある。また、対格を標示すると言われる助詞ヲと方言の対応もある。長崎方言においては共通語の主格助詞といわれているガは一般にノと対応し、対格ヲはバと対応する。しかし、ガについてはノを使用せず、長崎方言においてもガしか使用できないことがある。ノの使用、不使用を検討することによって、従来にない視点から共通語助詞ガの考察ができるのではあるまいか。また、共通語の対格助詞ヲが長崎方言において例外なくバによって置換されるとしたら、これも共通語の分析に利用できるのではあるまいか。方言と共通語の対応を日本語分析の有効な手段として利用してみたい。それが本稿における取り組みである。

助詞ハの位置付けがさまざまな変遷を辿ったのに対し、ガは格助詞として早くからその位置を確立し、安定していた。しかし、助詞ガにも問題がないわけではない。助詞ハと同様、助詞ガの意味論的意味一つをとっても、いま

だに確定したものはないというのが実情である。また、「水ガほしい。」「英語ガ話せる。」のような構文におけるガの帰属の問題がある。古くて新しい問題である。従来この種のガは対象を示すとされたり、主語であると言われたり、目的語を提示するとされたりしてきたがいまだに定説はない。助詞ガは帰属の分からぬ部分を抱えたままである。

本稿では長崎方言を試薬として助詞ガの分析を試みる。特に目的語、主語、対象語を標示すると説が分かれているこの種のガに焦点をあて、これまでほとんどなされてこなかった手法による分析方法によって、ガの帰属を明らかにしてみたい。

## 2. 日本語教育の多様性

### 2.1. 外国人が直面する多様な日本語

日本語教育ではかつて「です」「ます」の丁寧体の指導に終始していたが、日本国内においては丁寧体だけでは不十分であることが認識され、近年、普通体の会話も取り入れた日本語テキストが多くなってきた。日本人と親しくなるため、あるいは親しくなつてからの会話において、丁寧体だけでは用をなさないのである。そのような場面において、丁寧体はむしろ親密感の阻害要因として作用することが多い。

日本人の言語現象をみると、丁寧体と普通体が臨機応変に使い分けられている。したがって、外国人として丁寧体だけに精通していても、前面は立派だが背中のないスーツを着ているようなもので、実用に供することは難しい。むろんそのようなスーツであっても、証明写真をとる場合に役立ちはしよう。だが、それで街中を気楽に歩くことはできないのである。

教室においては日本人かと思えるほど上手に日本語を操る留学生が日本人の6歳の男の子と話す場に居合わせたことがある。そのとき彼は教室というフォーマルな場におけると同じ日本語を使って話していた。それは映画の王子と従臣の対話シーンを髣髴させる光景であった。彼は長年日本に住み、日本語学習にも熱心であつただけに、普通体での会話や場に応じた日本語使用の指導を受ける機会に恵まれなかつたのは彼のために残念であった。

長期滞在者でも、特に理科系の研究者のように大半の時間を研究室で費やす日本語学習者の場合、普通体での会話や場に応じた会話の自然習得は困難と考えられる。そのような学習者には日本語指導者の方で機会を捉えて、少

なくとも母語話者による場に応じた日本語使用の実体を紹介すべきであろう。豊富になったビデオ教材の利用により、それはさほど難しくはないと思われる。

だが、折り目正しいテキストの会話に上達し、友人とのくだけた会話もできるようになったからといって日本語はまだ充分とはいえない。さらに本稿で取り上げる方言が待ちうけているのである。日本語でのコミュニケーションに熟達するにはなんと手間のかかることか。その意味において日本語は厄介な言語といえる。

## 2.2. 言語教育に関する俗信

日本語教師はこのように多様な日本語を外国人学習者に教えなければならないが、外国人に対する日本語教育が盛んになった今日でも、日本語教師と日本語教育に関する俗信は跡を絶たない。その第一が「ある程度教養のある日本人であれば誰でも日本語は教えられる」であり、第二が「英語が話せれば日本語が教えられる」というものである。さらに、教科書は小学1年の国語の教科書から始めたらいいとか、共通に分かり合えることば（媒介語）がなければ教えられるなど、枚挙にいとまがない。

その裏返しに日本人の英会話学習法であり、中学・高校におけるAET（英語指導助手）の処遇問題である。ネイティブ・スピーカーであれば教授法も知らない素人であっても大金を払って先生と崇め、会話を習いに行く日本人が多い。教育学の訓練を受けた人しか語学教師になれないという意味ではない。訓練を受けてもいい教師になれない人もいれば、その逆もある。問題にしているのは、ネイティブ・スピーカー即ち語学教師という俗信である。

私的な英会話講師の選択という問題は純粹に個人的なものであるが、AETに関する問題はもっと深刻である。これには教師を選択できない中・高生にとっての語学教育という問題と税金という公金の問題が絡んでいる。留学生として在日中に日本語を教えた学生が大学卒業後にAETとなって再来日したり、来日したAETに日本語を教える機会があって、彼らから諸種の話が耳に入ってくる。その話から判断すると、これまでの中学・高校の英語教育に風穴が開けられそうなせつかくのいい制度が十分に生かされていないという思いを抱かざるをえない。

例えば自国で教職の経験もあり意欲もあるAETや日本で2年間の経験を積んでそれなりに語学教育の理論も研究しているAETをテープレコーダー

代わりに利用することしかせず、AETのやる気をそぐことに尽力する英語教師がいたり、逆に経験も語学教育に対する哲学もないAETに授業を総て任せる教師がいたり、チーム・ティーチングがうまく機能していないと聞くことが多い。また、AETは生徒の英語教育より、日本人英語教師の英会話の相手としてのほうがより貢献しているというAETの意見や、AETは配属校のマスコットの役割しかしていないという意見もある。

さらに、チーム・ティーチングの日本人相手教師を4タイプに分けてみせたAETもいた。彼によると、事前の共同準備も綿密でチーム・ティーチングが非常に上手な先生、教室でただ通訳の役割しかしない先生、後ろで授業を見物している先生、授業を任せっきりにして教室に来ないこともある先生の4種があるという。以上はAETの側からだけの話であり、ことの真偽は定かではないが、せつかくの制度が母語話者語学教師の役割に対する無理解がもとで充分活用されていない一面をもつのは事実と言えそうである。

次にAETに関する日本人の専門家のほうからの意見がある。英語教育関係の雑誌（『現代英語教育』1995, 6）に、AETが英語発音の権威となれるか否かという論議があった。それはネイティブ・スピーカーであるAETは英語発音のプロであるという主張に論駁を加えたものであった。専門家の間にこのような議論があるということは、日本人が語学教師としてのネイティブ・スピーカーをいかに捉えているかがうかがえて興味深い。

これを翻して見れば、日本語の母語話者である日本人の日本語の発音は総て手本として完璧といえるかという問題にもつながる。柴田 武（1995）に、氏が愛知県出身ということで東京風共通語のアクセントに必ずしも自信が持てない場合がある旨の記述がある。柴田氏は方言学、言語学の権威ともいえる大家であり、日本語の発音に関する著述も多い。氏の述懐は発音における母語話者の位置を端的に物語ってはいないだろうか。

英米をはじめとして英語圏からの人々に日本語を教えていると、特に初級段階では英語で質問を受ける機会が多い。そのとき痛感するのが、母語話者における発音の明晰性の多様さである。筆者の英語力を基準にしようというわけではないが、非常に聞き取りやすい発音もあれば聞き取りに苦労する発音もある。程度の差はあれ、どうやらこれは母語話者においても同様らしい。あるアメリカ人男性は、長崎で出会った同国人女性と話したところ、癖のある発音のせいでうまく聞き取れなかったと語り、発音に問題のある彼女が日

本で英語教師をしているそうだと笑いながら付け加えたことがある。

ネイティブ・スピーカーの英語発音を筆者の聴解力でとかくいうつもりはない。筆者にとって最も聞き取りやすいのは日本人の英語であり、筆者の耳がその程度のものであることは重々承知している。ここで言いたいのは、英語教育の専門家の中にさえ、語学教師としての母語話者に対する無批判な信仰が存在するということである。このことは語学教育のプロであるはずの中学・高校の日本人英語教師が英語教育において英語母語話者である AET を必ずしも活用できない面があることとあいまって、日本におけるネイティブ・スピーカーと語学教育の関係に対する認識がいかなるものであるかをよく物語っているといえる。英語教育の専門家たちの間でさえこのようであれば、日本語教育と母語話者である日本人教師に関する一般の誤解は推して知るべしといえよう。

### 3. 日本語教育と文法

日本語教師が助詞ハやガの分析などする必要はないというのも一般の謬見の一つである。日本語教師は既成の文法書を学習すれば指導できるようになるのであり、自前の文法研究など必要ないというのである。我が国には国語学の伝統があり、学校においても国文法は習ったはずだから、それを使って教えればよいというのがその論拠である。大半が自己の英語学習などの経験からでてくる意見である。

たしかに通常の日本人であればだれであれ日本語を教えることはできる。赤ちゃんと幼児の日本語教師はまず母親であり、ときには父親である。教養ある大人であれば児童、生徒の言葉遣いの乱れを指摘し、ただすことはできる。しかし、大学の日本語学習者は幼児ではない。ものごとを論理的に考える習性を身につけた大人である。必ず「なぜ」と質問してくる。また、幼児のようにゆっくり流れる時間のなかで自然に言葉を習得していくのでもない。短期間に文法的、理論的に外国語である日本語を身につけようとするし、また、そうせざるをえない状況に置かれてもいる。

「桜ガ咲いています。」と「桜ハ咲いています。」のような文は日本語学習の初期に出てくるものであるが、そのような学習者からこの2文におけるハとガの違いについて質問が出たとき、どのように説明すれば学習者を納得させることができ、その後の学習に有効に生かせるようになるだろうか。

通常、日本語教育では助詞ガは主語を示し、ハは主題あるいは話題をマークするといった説明をしている。それで学習者が納得したとしよう。では次の場合のガも主語と言っていいのだろうか。

(1) 私は水ガ飲みたい。

このガも主語をマークしていると言えるとして、次のガとヲはどうすれば論理の整合性を失わずに学習者を納得させる説明ができるだろうか。

(2) あ的那个人は上手に漢字ガ書ける。

(3) あ的那个人は漢字ヲ上手に書ける。

柴田（前掲）にもあるように、「ある」と「いる」の使い分けはどう説明したらいいのだろうか。通常、生物の存在は「いる」で示し、無生物の存在は「ある」で示すとされる。このように説明すると、必ずと言っていいほど木や花はどうかという質問がでる。さらに、車や電車、飛行機などの乗り物については「ある」を使ったり、「いる」を使ったりするが、その使い分けの基準は何か。エレベーターやエスカレーターの場合はどうか。難問続出である。それを切り抜けられたとして、「子供さんがいますか。」と「子供さんがいますか。」における「ある」と「いる」の違いはなにか、さらに、「昔、おじいさんとおばあさんがありました。」といったお伽噺における「ありました」について質問があれば、どのように説明すべきであろうか。

また、「～のだ」はどう説明したら学習者がその使い方に習熟できるようになるだろうか。「どうしたノデスか。」「おなかがいたいノデス。」あたりのノデスは「説明」を求め、「説明」しているので、ノダは説明に関する表現と解説できそうである。しかし、田野村忠温（1993）が指摘するように、

「ああ苦しい。」

「こんなにたくさん食べたからだよ。」

における「食べたからだよ」を「食べたノダよ」に置き換えてもいいとは言えない。では、どう考えればいいのだろうか。

このようなことは従来の学校文法では何も説明してくれない。日本語教育において学校文法はほとんど利用できないのである。このような日本語教育の実態をあるノンフィクション作家がレポートしたのがある<sup>1)</sup>。日本語教育機関をいくつか訪問して、この作家は、「私は奇妙なことに気がついた。かつて国語の授業でさんざん聞かされた動詞の五段活用とか上一段活用などといった文法用語がほとんど死語になっている」のように日本語教育の場に

臨んでの驚きを表明している。これを読むと、レポートの作家がそれ以前に教育関係のものを扱っている人だけに、日本語教育の内部にいる者として「専門家の常識は一般の非常識」ということをことさら痛感させられたのだった。

一般の人々とさほど関係のない特別な「業界」あるいは領域であれば、それでも構わないであろう。しかし、ことは日本語という日本人が日常的に使用している言語である。しかも国際化の進展にともなって今後さらに日本語を話したり、日本語学習を希望する外国人の増加が見込まれている。これは長崎大学における留学生の年々の増加だけをみても明らかである。これからは誰であれ外国人に日本語で話しかけられ、ときには日本語について質問を受ける可能性がある。このような時代であれば、日本語教育に携わる人々も単に世間の誤解や無理解を嘆いて、ますます閉鎖的・高踏的になるのではなく、一般の人々に向かって蓄積されたノウハウを分かりやすい形でさらに積極的に開示すべきではあるまいか。

前述の助詞ハとガの機能や「～のである」などについては相当に研究されていて、いずれもそれなりの説明はできるが、まだ決定的な説はないというのが実情である。日本語を母語とする日本人であれば、通常間違いなく使用する日本語のなかで、意味や用法の違いについて説明を求められると返答に窮するものは数えきれないほどある。国広哲弥はそのように説明できないものに「説明的未知」と名付けて解析を行っている<sup>2)</sup>。例えば、日本人がなにげなく使用する「雨が降らないうちに」などの「～ないうちに」と「～するまえに」の意味・用法の違いを、総ての例外がでないように矛盾なく外国人に説明できる人がどれくらいいるだろうか。このような説明的未知は非常に多い。そこに日本語教師が自前の文法研究に取り組む一つの理由がある。それぞれ研究成果を発表して検討することにより、より分かりやすく、より総括的な説明に到達しようとしているのである。ひいてはそれが日本語の辞書の改良にもつながり、一般の人が外国人と話すときの日本語の説明に役立つようにもなるのである。

#### 4. 日本語教育と方言

##### 4.1. 外国人学習者と方言学習

日本語教育において扱うべき日本語は多様であるが、大学においては普通



体までの教育で手一杯の状態、方言の指導までは手が回らないのが現状である。ところが、方言学習に対する学習者の要望は予想以上に大きい。1995年5月に長崎大学外国人留学生指導センターと諫早市にある長崎ウエスレヤン短期大学の留学生クラス、および私的な日本語教育機関において、日本語初級後期以降の学習者を対象に方言学習に対するアンケート調査を実施してみた。すると対象となった30名のうち90%にあたる27名が方言学習を希望しているという結果が出た。

学習者の方言学習に対する高い要望は他都市における先行調査にも現れている。『方言と日本語教育』(1993)によると、何らかの程度まで方言の指導を希望する学習者は、1988年の佐治圭三による関西における調査では87%、1991年の福岡における川辺・滝尻の調査では62%、1991年の近畿地方における備前 徹の調査では87.2%、1992年の東北における大塚 徹による調査では78.9%となっている。

外国人学習者はなぜ方言学習を希望するのであろうか。1995年度の調査では「方言を聞いて分きたい」「方言が分からなくて困ることがある」という意見が多かった。調査対象が初級後期から上級までの学習者であることから方言と共通語の識別はかなり信頼できると考えてよい。この調査結果は教室の外ではかなり方言が使用されていることを物語っているといえよう。また田尻英三(1991)も報告しているように、留学生は身近な人々の間で行われる方言混じりの会話に入り込めずに疎外感をいただく場合があるとも考えられる。それまで親しく話していた人が、突然理解できない外国語で近くの人と話し始め、その会話に全く入り込めなかったという経験のある人なら、周囲の方言での会話に入って行けない留学生の疎外感は充分理解できるであろう。

#### 4.2. 方言と共通語

さらに日本語における方言と共通語の境界の曖昧さも問題である。多少のアクセントの違いを残しながら、語彙の点で全国共通に通じる日本語を共通語と規定するとしても、一般の人がどれほど完璧に共通語が話せるかは疑問である。長崎の人であれば、共通語を話そうとしているときであっても、鞆を「カパン」、自転車を「ジデンシャ」と発音することが多いし、「本を借りて来る」が「本バカッテクル」となって、誤解を招くことさえある。ちなみに「本を買って来る」に当たる長崎弁は「本バコウテクル」となる。(本稿

では長崎方言の発音はほとんど問題にしていないので、以下でも同様に長崎方言は漢字と片仮名あるいは平仮名を使用して表記する。)

共通語を話そうとしても、方言を完全に排除できないのは学生に講義するときの大学教官にもみられるそうである。田尻（前掲）は鹿児島大学での例として、地元出身の教師の場合、「本人の意識無意識にかかわらずかなり方言が講義の中に混じり」、留学生にとって「ノートが取りにくい状況であった」ので、留学生に方言教育を行ったが、鹿児島方言の音声・音韻と共通語のそれとの隔たりの大きさのために困難がともなっていると述べている。

このように留学生が否応なく接触する大学の教官や事務官の共通語にさえ方言が混じる可能性があるのは、日本語における方言と共通語の境界の曖昧さのせいである。備前 徹（前掲）は留学生に対する方言教育の必要性を説き、「日本語の場合、方言と標準語との区別・交替がある段階で完全に線引のできる明確なものではなく漸次的なものである」ことを留学生に説明する必要があると述べている。

このような現象が生じやすい原因については柴田（前掲）が分かりやすい。それを紹介するまえに、方言という語にふれておきたい。一般に方言というと長崎方言の中のバツテン（けれども、だけど、けど）、ヨカ（いい）などのように、その地域特有の語彙ないし表現と捉えられているが、学問的にはその地方の特色をなす単語は俚（／里）言と言われる。方言とは他の地方との差異をもつある地方の言語現象の全体をさすものである。

この前提のもとに柴田は47都道府県にそれぞれ1点を与え、47点の語を全国語、多数決の原理により24点以上を共通語として、いくつかの語についての調査結果を発表している。すると多数決原理が機能しない場合があるという。例えば、トウキビは29点、トウモロコシは23点であるのに、一般にトウモロコシが共通語として認められるのは、共通語の認定に多数決とは異なる基準も働いているからだという。その基準とは首都の言葉であるか否か、すなわち「みやこ語」であるか否かという基準である。共通語の認定には事実を基に多数決によって客観的に決められる部分と、首都の言葉であるか否かという価値を伴う基準のいわばダブルスタンダードが存在するわけである。外国人を対象とした日本語能力試験の聴解テストの練習に関西、九州では東京の地域語としか考えられていない「～チャッタ」という表現が平気で使われるのもこの現れであろう。

共通語がこのような基準で認定されるとすると、全国語でないものを共通語と認めるには個人差が生じる可能性がある。また、首都の言葉を尊しとしない人々の共通語意識も自ずと分かってくる。筆者自身、東京のある大学でその大学出身の教官でありながらコテコテの関西弁を使用する先生の講義に出席したことがある。標準的なテキストで日本語を習得した留学生はそのような講義をどの程度理解できるであろうか。留学生に対するある程度の方言教育が必要であると同時に、留学生と接触のある教官のほうでも共通語と自己の使用する日本語の再確認が必要なのではあるまいか。

日本語を勉強した英国人ビジネスマンが、日本人は日本語で外国人と話すことに慣れていないようだと言ったことがある。彼によると、英国人であれば相手が英語をよく解さない外国人と分かると、スピードを落としてはっきり発音しようと心がけるのに、日本人は逆に早口になり、その結果、それまで少しは分かっていたものまで全然分からなくなるというのである。これとは反対に、相手が日本語を解さないと分かると、抑揚やアクセントを不自然に変え、助詞をほとんど省略して外国人の日本語はこのようであると思込んでいる話し方、いわゆるフォーリナートークに切り換える人もいる。いずれも日本語で外国人と話すことに不慣れな場合に生じる現象である。

#### 4.3. 方言教育の問題点

留学生の日本語がテキストの日本語だけでは充分用をなさない場合、ある程度の方言教育が必要と考えられるが、これには大きな問題がある。誰が教えるかという問題である。前述したように教養ある日本人であればだれでも日本語教師は務まるという謬見が広まっているところからすれば、方言教育も、母方言話者ならだれでも務まる、あるいは日本語が多少できるようになれば周囲から自然に習得できるという意見が大勢を占めるものと考えられる。

そのような意見に対して外国人学習者の立場からダニエル・ロング(1992)は警告を発している。「自然習得には長時間を要し、時間を無駄にしやすい。誤った語彙や文法形式の解釈を身につけることがある。方言の意味の誤解だけでなく、方言形式と標準語形式との対応のしかたが分からないために標準語に対して方言からの干渉が生じる。」以上3点をあげて日本語教育関係者に方言の体系的指導の必要を説いている。特に、最後の標準語への方言干渉は標準語への体系的指導のできない素人の方言話者が日本語学習者に方言を教えた場合に起こりやすいと述べ、「日本語が話せる人イコール日

本語教師でないと同様に、方言が話せる人イコール方言が教えられる人ではない」という生越直樹のことばを引用している。まさにその通りであろう。

例えば長崎方言にタイ、バイという終助詞があり、次のような使い方をする。

今日ハ寒カバイ。

アン人ハ今日東京カラ帰ッテ来タトタイ。

これについて上村孝二(1983)に「肥筑のバイ(わ)・タイ(のよ)は有名だ。バイはワイより転じ、タイはトワイに由来する」とある。また柴田(前掲)には「バイ、タイは、九州方言として有名な終助詞で、東京語の「よ」ぐらいの意味である」という記述がある。ともにバイ、タイの分析を目的とした箇所ではないが、このような説を無批判に方言指導に使用すると、例えば次のような「タイ」に出会って身動きがとれなくなるおそれが生じる。

A: 今日ハ寒ウシテタマランバイ。

B: ソイケンソンゲンヨケイ着コンドットタイ。

最後のタイは相手の状態を確認するために使用されていて、いい共通語訳が搜せないが、ここでは「だからそんなにたくさん着込んでいるワケナンダネ?」ぐらいになる。「のよ」や「よ」では説明がつかないのである。

このように、外国人への方言指導においても通説だけに頼ってはい解明できないものがあり、言語学を応用した日本語学の手法による従来にない分析が必要である。そうでなければ学習者の方言による共通語への干渉を教師自身が促進することになりかねないからである。

## 5. 長崎方言の現況

日本語教育と方言の関係は上述のように外国人学習者の要望に基づく方言教育の側面と、共通語の中の説明的未知の解析に方言を利用する方法の二面が考えられる。後者はこれまで言語学による日本語の分析に際して時折言及されることはあったが、体系的に利用するということになるほとんど手がけられたことはなかった。それが有効性をもたないからか、方言学と日本語教育における日本語の分析は接触をもつべきでない異分野で、接点はどこにもないという考えからか分からない。その意味では本稿はやや冒険になるかもしれないが、一つの新しい試みにはなるものと考えられる。

本稿は長崎方言の助詞の用法を共通語の助詞ガの分析に利用するものであ

る。その前に、長崎方言の現在の概況に触れてみよう。ここでいう長崎方言は長崎市の中央部を中心とする旧長崎市とその周辺の一部を含むものである。長崎方言は九州を代表する肥筑方言に属し、福岡、佐賀、熊本方言と共通する点が多い。以下に発音、文法の順で現在の長崎方言の概要を述べてみよう。

### 5.1. 発音

アクセントは長崎音調といわれるもので、平山輝男の命名になる二型音調である。2音節語において前高か後高のアクセントをもち、助詞ガ（後述のように長崎方言ではほとんどノとなる）がつくとアクセントが1音節ずつ後ろへずれるという特徴をもつ。

発音のうえで特徴的なのはウ音便の多用である。これは形容詞に多いが、動詞にもみられる。形容詞のテ形（連用形）は次のようにウ音便化する。タコウシテ（高くて）、サムウシテ（寒くて）、イソガシュウシテ（忙しくて）、サビシュウシテ（寂しくて）、ヨウシテ（よくて）などのようになる。動詞では前述のコウテ（買って）の他に、ウトウテ（歌って）、イウテ（言って）、クウテ（食って）、モロウテ（もらって）などがある。

かつて長崎方言の発音の特徴と言われていたシェンセイ（先生）、ジェンジェン（全然）などのシェ、ジェ音は若者層からほとんど姿を消そうとしている。ある小学校の先生に小学生におけるシェ音の有無について伺ったところ、最近の子供たちからシェの発音を聞くことはないという答えであった。これにはテレビの影響がもっとも大きいと考えられる。子供時代にテレビがほとんど普及していなかった50歳代ではまだかなりシェ、ジェ音が聞かれるが、年齢が下がるにつれてその使用者は激減する。現在の小学生の親の世代はシェ、ジェ音消滅への過度期にあたっているから、テレビが親子二世代を通じて長崎方言からシェ、ジェ音を駆逐してしまったといつてよい。

かつて特徴的であった発音で今まさに風前の灯といった状態にある発音がある。クワ〔kwa〕、グワ〔gwa〕の発音がそれである。20年ほど前まで高齢者からクワジ（火事）、シャクワイ（社会）、クワイギ（会議）、グワイコク（外国）などかなり頻繁に耳にしていた発音が、最近はほとんど聞かれなくなってしまった。現在の60代の人に極めて少数ではあるがこの発音をもっている人がいる。それより高齢の人でもこの発音を使用する人は非常に少ないので、この発音が長崎方言から完全に消滅するのも時間の問題であろう。25年ほど前の調査において、この発音は少年層ではほとんど聞かれなるとある。

当時の少年は現在中年であり、中年層からこの発音が聞かれないという筆者の観察と一致している。

キンピツ [jempitsu] (鉛筆)、キビ (海老) などのキ音は最近ほとんど聞かれないが、筆者が留学生に聞き取りの形式で単語を教えていて、やや大きく、ゆっくり「えき」と言ったとき、[eki] ですか [jeki] ですかと聞き返されたことがある。このことから筆者ぐらいの年代までどこかにキ音の名残をとどめているものと推測される。

ジ、ヂ、ズ、ヅの発音を使い分ける「四つがな」は九州にかなり広く分布していると言われるが、長崎方言にはこの発音はない。ジとズを使い分けるだけの、柴田 (1988) に従えば東京・京都と同じ「二つがな弁」に属している。

## 5.2. 文法

一部の動詞に共通語と活用が異なるものがある。例えば「する」の命令形はセロであり、否定形はセンである。動詞の否定形はセンに限らず、総て古語ヌの名残のンであり、「起きない」は起キン、「書かない」は書カンとなる。勧誘の「しようか」はスーカ、「食べようか」はタブーカ、「出ようか」はズーカが今でも使われることがある。

敬語は「行きナル」「飲みナル」のように動詞+ナルが普通であるが、全国的に人を敬わない風潮が広まったせいも、若年層からこの表現を聞くことは稀である。なお、この敬語表現は後にガの分析に使用する。

動詞来ルを英語の come のように「聞き手のもとに行く」という意味で使用する。「明日ノ会合ニハカナラズ来ルケン。」(明日の会合にはかならず行くから) や「チョット待ツotte、スグクルケン。」(ちょっと待っていて、すぐ行くから) のように使う。

可能表現は能力可能と状況可能を使い分ける。能力可能は～キル、～エル、～ユルが使用されるが、～キルがやや優勢であろう。「英語バ話シキル。」(英語を話すことができる。) のように使う。状況可能にはレル、ラレルを使用する。「今日ハ車ヤケン酒ハ飲マレン」(きょうは車だから酒は飲めない) のように使う。両者を1文の中で使うと、「酒ハノミキルバツテン、今日ハ車ヤケンノマレン」のようになる。

既然相と進行相の区別があるのも特徴の一つである。進行相には通常ヨルを使い、既然相にはトルを使う。「雨ノフリヨル」(雨が降っている。) は現

在雨が降っている状況で言い、「雨ノ降ツトル」は道などが濡れているのを見て雨が降ったことを知ったようなときに言う。

接続は逆接に～バッテン、理由の順接に～ケンを使うのが特徴的である。「今日ハ日曜日バッテン、仕事ニ行カンバ。」(今日は日曜日だけど、仕事に行かなければならない)と言い、「飲ミスギタケン、頭ノイタカ。」のように言う。

動詞の否定の「ない」がンとなるのに対し、形容詞の否定は次のようにイ形容詞ではウ音便をともなって～ナカとなる。「安ウナカ」(安くない)、「寒ウナカ」(寒くない)。一方ナ形容詞の否定は次のようにジャナカの形をとる。「元気ジャナカ」(元気ではない)、「静カジャナカ」(静かではない)。また、存在の否定も「眼鏡ノナカ」(眼鏡がない)のようにナカとなる。

その他様々な特徴があるが、本稿は長崎方言の考察が目的ではないので、他は割愛し、ガの分析に必要な次の2点をあげて現況の報告は終わりたい。一つは主格の多くをノ(会話ではンとなることが多い)で表し、対格をバで表すことである。

主格ノは次のように使う。「本ノナカ。」(本がない)、「アソコニ桜ノ咲イトル。」(あそこに桜が咲いている)。なお、準体助詞ノには、「アオカト」(青いの)、「手紙バ出ストバ忘レタ。」(手紙を出すのを忘れた)のようにトを使用する。共通語の対格の助詞ヲは次のようにバとなる。「水バ飲ンダ。」(水を飲んだ)、「手紙バモロウタ。」(手紙をもらった)。「ナンバ食ベタト。」(何を食べたの)。

## 6. 長崎方言における主格助詞の分布

助詞ガは一般に格助詞に分類され、主格とされている。これには異論もあり、筆者もその異論のほうに加担する者であるが、ここでは混乱を避けるためにこれまでそうしてきたようにしばらく通説に従って主格という語を使用することにする。

上述した長崎方言の格助詞を利用して、これから助詞ガを検証してみよう。長崎方言において主格は通常ガではなくノで表すとされている。なお、くだけた会話の場合、ノはンとなるのが普通であるが、ここではやや改まった感じのするノを使用して表記する。また、総てにやや上品な表現を採用する。

まず、文をその生命である述語の性質によって通説に従い次の3種に分け

る。述部の中心が動詞であるものを動詞述語文、形容詞であるものを形容詞述語文、名詞であるものを名詞述語文とする。ナ形容詞（形容動詞）は形容詞述語文のなかに入れる。以下それぞれ助詞ガとノの分布を調べてみよう。

特別な断りがない場合、上に格助詞ガを使用した共通語の文を提示し、その下に長崎方言による同意の文を提示する。ここでは方言の文も共通語の文との対比が明瞭になるように助詞ガ・ノを除いて共通語と同じ表記とする。共通語においても問題にしている助詞は片仮名で示す。方言の文頭につけた\*、?、??の記号は次のように用いる。長崎方言の助詞ノに関して、\*は誤り、?はやや不自然であるが誤りと明言できないもの、??はかなり不自然であるが完全な誤りとは断定できないものとする。長崎方言においてノの使用に問題のある箇所は総てガが使用されている。

a. 動詞述語文の場合

- (1) あした山田さんガ京都に行く。  
あした山田さんノ京都に行く。
- (2) きノウ山田さんガ来た。  
きノウ山田さんノ来た。
- (3) 山田さんガ本を読んでいる。  
?山田さんノ本ば読みよる。
- (4) 山田さんガ食堂で昼ご飯を食べる。  
?山田さんノ食堂で昼ご飯ば食べる。
- (5) 山田さんガ食堂で昼ご飯を食べていた。  
?山田さんノ食堂で昼ご飯ば食べよった。

(3)(4)(5)において多少の違和感を覚えるのは、「山田さんノ本」「山田さんノ食堂」が、「山田さん所有の本」や「山田さん所有の食堂」と紛らわしいからであろう。談話や会話の当事者たちが山田さんを見ながら発話するといった文脈があれば不自然ではないだろうが、孤立した文においては行為者が「山田さん」以外である可能性を否定できないからである。これは次の(6)(7)(8)のように「山田さん」と後接する名詞との間に他の語を挿入させて所有関係の意味が入り込む可能性を断ち切ってしまうと何ら不都合を生じないことでも明らかである。

- (6) 山田さんガあそこで本を読んでいる。  
山田さんノあそこで本ば読みよる。



- (7) 山田さんがあした食堂で昼ご飯を食べる。  
山田さんノあした食堂で昼ご飯ば食べる。
- (8) 山田さんがきのう食堂で昼ご飯を食べていた。  
山田さんノきのう食堂で昼ご飯ば食べよった。

孤立した文であっても、「山田さんノ、食堂で昼ごはんば食べよる。」のように、ノのあとに1拍休止を入れると不自然ではなくなることもこれを裏付ける。この現象は助詞ノが助詞ハにもやや近い機能をもつことも示している。

次に(3)(4)(5)を尊敬語化してみよう。比較のために、「召しあがる」の使用を避けることにする。

- (9) 山田さんが本を讀んでいらっしゃる。  
山田さんノ本ば読みよんなる。
- (10) 山田さんが食堂で昼ご飯を食べておいでになる。  
山田さんノ食堂で昼ご飯ば食べよんなる
- (11) 山田さんが食堂で昼ご飯を食べておいでになった。  
山田さんノ食堂で昼ご飯ば食べよんなった。

ここでも長崎方言での違和感が消失してしまう。これは尊敬語化された「食べよんなる」「読みよんなる」の敬意の対象は「山田さん」であり、けっして「山田さんの本」や「山田さんの食堂」ではありえないからであろう。ただし、行為者が他にある場合の所有のノを排除するわけではない。

以上のように主格ガに名詞が後接し、そこに所有関係を疑わせる可能性がある場合は長崎方言ではノの使用を避けて、ガを使用する。これは歴史的にガとノの分化を推進した力の一つと考えられるが、そのような視点からの考察は機会を改めて行うことにしたい。

#### b. 形容詞述語文

- (12) りんごガおいしい。  
りんごノおいしか。
- (13) りんごガおいしかった。  
りんごノおいしかった。
- (14) 日本語ガむずかしい。  
日本語ノむずかしか。
- (15) このりんごガおいしい。  
? こんりんごノおいしか。

(16) あのりんごがおいしかった。

? あんりんごノおいしかった。

(17) りんごはこれガおいしい。

\* りんごはこれノおいしか。

(12)から(14)までは日常使用されるが、(17)のノは不自然である。(15)と(16)のノはハに近く、共通語のガと完全に対応しているとは考えにくい。助詞ガ、ノともに述語の主体を特定する機能を担っているが、(17)のようにある有限数を感じさせる対象の中から1つを選出するときは長崎方言においてもガを使用する。このことから、ガには述語の主体を強く特定するという機能があるといえる。これは次のように強い特定を要求する文ではノは姿を消し、ガの一人舞台となることでも分かる。以下は方言による会話である。

(18) A: こっちのおかしとそっちのおかしと、どっちガおいしかね。

B: こっちのほうガおいしかばい。

(19) A: スポーツのなかで、なんガ一番おもしろかね。

B: 野球ガ一番おもしろか。

(18)(19)ともガをノに置き換えると不自然になる。ガには強い特定機能があり、ノにはそれがないことがよく分かる。これは共通語助詞ガの性質の一端を表すと考えられる。次に述語がナ形容詞(形容動詞)の場合を見てみよう。

(20) 山田さんガ元気だ。

山田さんノ元気か。

(21) 山田さんガ元気だった。

山田さんノ元気かった。

(22) 山田さんと森さんでは、山田さんガ元気だ。

\* 山田さんと森さんでは、山田さんノ元気か。

(23) 会社では山田さんガ一番元気だ。

\* 会社では山田さんノ一番元気か。

ナ形容詞(形容動詞)においても通常はノが使用されるが、(22)(23)に見られるように、特定機能が強くなるときはノは使用されず、ガが現れる。aの動詞述語文において助詞ノに名詞が後接するとき属格との紛糾を避けるという理由からノは使用されず、ガが使用されることを見た。形容動詞の語幹は名詞性を持ちうるが、(22)におけるノの不使用は、属格と一線を画すためではなく、強い特定機能のためガが要求されたものである。

c. 名詞述語文

(24) 山田さんが社長だ。

\*山田さんノ社長だ。

(25) これガ和食だ。

\*これノ和食だ。

(26) あれガ病院だ。

\*あれノ病院だ。

(27) 読書ガ趣味だ。

\*読書ノ趣味だ。

(24)–(27)から名詞が後接して属格と区別しにくいときは長崎方言において主格助詞ノの使用は避けられることが分かる。

以上のように長崎方言における主格ノは名詞が後接し、属格と紛らわしい場合は使用されず、また強い特定機能が要求される場合も使用されない。ここで、述語の種類による分類を離れ、問題となりそうな諸種の文におけるノの使用について検討してみよう。

d. 疑問詞のある疑問文

(28) 誰ガ京都に行った。

\*誰ノ京都に行った。

(29) 今何が来た？

今何ノ来た？

(30) 何が一番おもしろい？

??何ノ一番おもしろか？

(31) スポーツのなかで何が一番おもしろい？

??スポーツのなかでなんノ一番おもしろか？

(32) 桃とみかんと梨のなかで何が一番高い？

\*桃とみかんと梨のなかでなんノ一番高か？

(33) 桃と梨とどちらがおいしい？

??桃と梨とどっちノおいしか？

(34) 人口はどこが一番多い？

\*人口はどこノ一番多か？

(35) うなぎはどこがおいしい？

\*うなぎはどこノおいしか？

- (36) どこガいたい？  
 どこノいたか？
- (37) 足と腰と肩と、どこガ一番いたい？  
 ?足と腰と肩と、どこノ一番いたか？
- (38) パーティーはいつガいい？  
 \*パーティーはいつノよか？

(28)–(38)により、最も特定機能が要求される疑問詞つきの疑問文においてノの出現が非常に少ないことが分かる。(29)(36)のように一部例外もあるが、長崎方言において主格助詞ノは疑問詞と共起しにくいと言える。

#### e. 現象文

眼前の事象に判断を加えずそのまま描写する現象文といわれる文においては助詞ガが助詞ハを排して使用される。現象文はガを説明する上で重要な概念であるが、長崎方言において現象文のなかでノが使用できるであろうか。

- (39) 花ガ咲いている。  
 花ノ咲いとる。
- (40) あそこに犬ガいる。  
 あそこに犬ノいる。
- (41) 電車ガ来た。  
 電車ノ来た。
- (42) 風ガ冷たい。  
 風ノ冷たか。

現象文と言われるもので共通語においてはガが使用されるところでも長崎方言においてはノの使用が極めて普通である。

#### f. 慣用句ないし成句における助詞

慣用句ないし成句のなかで助詞ガが使われるものがあるが、長崎方言ではどうであろうか。

- (43) 借金で首ガ回らない。  
 借金で首ノ回らん。
- (44) 身ガもたない。  
 身ノもたん。
- (45) 彼には歯ガ立たない。  
 彼には歯ノ立たん。

- (46) 彼は彼女に気がある。  
彼は彼女に気ノある。
- (47) 今度の旅行は予算から足ガ出た。  
今度の旅行は予算から足ノ出た。
- (48) しかたがない。  
しかたノなか。

このような場合も長崎方言ではノを使用するのが普通である。

#### g. 連体修飾節

共通語において連体修飾節における主格には節が短い場合はガないしノが用いられ、節が長くなると通常ノは避けられてガが用いられる。長崎方言においてはどうかであろうか。

- (49) 山田さんが（ノ）作ったケーキはとてもおいしかった。  
山田さんノ作ったケーキはとてもおいしかった。
- (50) 山田さんがきのう娘さんと一緒に作ったケーキはとてもおいしかった。  
山田さんノきのう娘さんと一緒に作ったケーキはとてもおいしかった。

(49)は短い連体節で共通語においてもどちらかといえばノが好まれそうである。(50)は長い節で、ノの使用は避けられる。しかし、長崎方言においてはノであっても気にならない。(50)を尊敬語化してみよう。

- (51) 山田さんノきのう娘さんと一緒に作なったケーキはとてもおいしかった。

(51)は極めて自然である。ここでガを使用すれば多少方言らしさが薄まる感じをうける。このように長崎方言においては連体節が長くなっても、名詞が後接して属格と判別しにくくならない限り主格はノで構わない。

- (52) 山田さんノ娘さんと一緒にきのう作なったケーキはとてもおいしかった。

(52)はノに名詞が後接しているが、発話時に「山田さんノ」でわずかに休止を入れさえすれば、山田さんがケーキを作ったことは間違いなく伝わり、何ら不都合を生じない。この場合「作なった」という敬語があるので会話においてはガよりはむしろノのほうが好まれるかもしれない。

## 7. 長崎方言における敬意表現と助詞ガ、ノ

以上見たように長崎方言においては敬意を伴うときガよりノのほうが多用される。なぜ格助詞ノはガよりも敬意表現と結び付きやすいのであろうか。この現象は神部宏泰（1969）によると長崎だけでなく、肥筑の多くや薩隅など九州各地でかなり見られるそうである。しかし、神部は同時にその傾向が全般に淡くなっていると述べている。西島 宏（1969）は長崎県内でも県北の一部や島原などでは「先生ガ」のように敬意がガと結びつくことを報告している。神部（前掲）は島原の一青年が、「先生ノ来ラシタ。」よりも「先生ガ来ラレタ。」を上品な表現として意識していることを伝え、「来ラシタ」「来ラレタ」の差だけでなく、おそらく主格表示のガを共通語意識に支えられて上品としているのであろうと分析している。

ガを尊敬度が高いとする所は共通語尊しの意識があると考えられるが、長崎方言や九州のかなりの地域がそうであるようにノのほうに高い敬意を感じるのとはなぜであろうか。その解明には次のような長崎方言の感嘆表現が参考になろう。

(1) 山田さんノ元気さ！

(2) あの船ノ大きさ！

「元気さ」「大きさ」は共通語の「元気なこと」「大きいこと」にあたる。共通語の名詞、「元気さ」「大きさ」がそのままでは感嘆文を作らないのに対し、「元気なこと」「大きいこと」は次のように共通語でも感嘆文となる。

(3) 山田さんノ元気なこと！

(3)が女性的であるように、長崎方言の(1)(2)も女性のほうが好んで使うが、女性に限られるわけではない。このノは属格のノであろうが、長崎方言では限りなく主格に近い印象を与える。ここにガを使用してみよう。

(4)\*山田さんが元気さ！

(5)\*あの船ガ大きさ！

(4)の誤りを咎めることなく無理に解釈すれば「いつも元気のないあの山田さんが今日はどうしたことかいつになく元気なことだ」といったようにでもなるだろうか。助詞ガに過重な情報を担わせなければならなくなる。(5)は船に伸び縮みは考えられず、どのようにも解釈の余地のない文である。この種の感嘆文ではガは夾雑物となる。感嘆の対象は「山田さん」であり、同時に「その元気さ」である。両者を一体として感嘆の対象とするには発音、意味

ともに控えめなノでなければならない。ガは我を張りすぎるのである。

長崎方言において尊敬表現の主格にノが好まれる理由も同じ原理であろう。「先生ノきなつた。」が「先生ガきなつた。」となりにくいのは、単に習慣だけの問題ではない。鼻濁音をもたない長崎方言においてガを使用すると、ガは強く響いて文がそこで分断される印象を与える。それでは「きなつた」のもつ敬意が先生に届かなくなり、敬意は先生にではなく「来る」という行為にだけ払われた印象を与えてしまう。先生とその行為を一体として敬意の対象とするにはやはり控えめなノの機能に俟たなければならない。

一方、「先生ガ」は「来た」に結び付く。神部（前掲）にもあるように、最近「先生のきなつた。」が「淡くなりつつある」のは、平等意識のはきちがえから他者を敬する気持ちが薄れたことにも大きい原因があるだろうが、共通語の浸透によりガを多用することで「きなつた」という敬意表現ができにくくなっているとも思われる。「先生ガ来られた。」は「先生ノきなつた。」に較べて発音しにくく、「先生ガいらっしゃつた。」や「先生ガおいでになつた。」は他所行きに過ぎる。いきおい「先生ガ」のあとは「来た」となるのである。

ノのもつ行為者と行為との一体感が長崎方言における敬意表現と結び付きやすいという観察は筆者だけの語感ではない。共通語においてさえ類似のことが言えるようである。萩野貞樹（1993）は、文学作品における主格助詞ノについて「一面曖昧の犠牲を負いながらも表現の勢い、情味、感情、息遣いをよく伝え」と述べ、一方、ガは論理性を明確にするものの、動作部分が絶たれて浮き上がると述べている。さらに、これは文学作品に限らないとして、「先生のおっしゃつたことは胸にしみました。忘れません。」などの例をあげてノとガの敬意の伝わり方の違いを解説している。細部に多少の違いはありはするが、筆者の分析とほぼ同じである。

## 8. 主格助詞ガとノ

長崎方言において主格助詞と言われているガとノの使用、不使用を見てきたが、以上のことからどのようなことが言えるだろうか。まず長崎方言のほうからみれば、少数の場合を除いて主格助詞にはノのほうが好まれることが分かる。ノ使用が避けられるのは属格と紛らわしい場合、大半の疑問詞の後、それに強い選択、特定の意識が働く場合である。この点から長崎方言の主格

助詞ノは強い特定機能をもたないことが分かる。

逆に長崎方言のノの使用・不使用の方から共通語の主格助詞ガを照射すると通常主格助詞ガと一くくりにされているものにも、特定機能の強いものから弱いものまでその段階はさまざまであるといえる。また長崎方言のノが特定作用の強いガに代わることができないことからガの機能の第一は述語の主体の強い特定であると言えそうである。だからこそ短い連体修飾節のように強い特定機能を必要としないもの、述語の中に溶け込んで述語と一体となつてほしいものには共通語においてもノが好まれるのであろう。「鐘ノ鳴る丘」「レンタカーノある駅」などタイトルや駅の宣伝文句の連体節にガよりノの方が好まれる理由もここにあると考えられる。ガは共通語においてもかなり耳障りな強い音である。だからこそ逆に「嵐ガ丘」のタイトルはガの使用によって現代においても内容の激情に合った名訳になっているのであろう。

## 9. いわゆる対象語・目的語提示のガ

### 9.1. 研究史概観

主格を提示するとされていた助詞ガから「仕事ガつらい」などのガに独立を促したのは時枝誠記（1950）である。時枝は対象語格という術語を創出してこの種のガに与え、客語（目的語と同じ）や主語格とも区別した。ただし、時枝は「山が見える。」「犬がこわい。」の「山」「犬」を主語ではなく対象語であるとしながら、そのすぐ後でこれらを「主語として取り扱うことが、全然不合理と考えられないのは何故か」と自問している。そして「見える」「こわい」には主観的な側面だけでなく客観的側面があるからだと解説し、必ずしも主語説を否定してはいない。しかし、「足が痛い」「水がほしい」の場合は述語「痛い」「ほしい」は全く主観的な感覚感情の表現であるから「足」「水」は対象語であつて、決して主語ではないとしている。このように時枝の対象語という概念は述語の主観、客観の度合いによって多少の揺れを内包するものである。

橋本進吉（1969）は時枝のような考え方を論理的なものとして退け、ことばとして主語であると主語説を踏襲し、時枝と反対の立場をとっている。橋本は「雷を恐る」のように動詞に対しては客語となるが、「雷が恐ろしい」のように形容詞のときは主語の意味になるものが多いと述べ、「水がほしい。」「水が飲みたい。」「あの人がすきだ。」などの例をあげている。



その後、久野 暉（1973）は時枝が対象語としたものを目的語として、意味の上から格助詞ヲの出現が期待されるところにガが現れる構文を以下のよう  
に6種類に分けている。時枝文法における対象語格のガもほぼ同じ範疇である。本稿で長崎方言によってこの種のガの分析を試みるので、ここにその6種類をあげてみよう。

- 1) 能力を表す形容詞、形容動詞：上手、苦手、下手、得意、うまい
- 2) 内部感情を表す形容詞、形容動詞：好き、嫌い、欲しい、こわい
- 3) 動詞+タイ
- 4) 可能を表す動詞：できる、れる／られる
- 5) 自意志によらない感覚動詞：解る、聞こえる、見える
- 6) 所有、必要を表す動詞：ある、要る

この種の助詞ガはいまだに帰属がはっきりしていない。日本語教育において、文法用語を直接用いて教えることは有益ではなく、通常行われませんが、理詰め  
で学習する習性が身についた学習者は文法的な質問をしがちである。そのとき返答に困るのがこの種のガである。このような質問がきても、最後は、日本語は日本語であって、このようなときはこうなるのが日本語のルールであると説明すればけり  
はつくのであるが、学習者は判然とせぬ思いを抱き、日本語は非論理的な劣った言語であるといった批判を口にするようになる。この種のガの帰属はどう考えるべきであろうか。

## 9.2. 長崎方言における対格助詞バの分布

長崎方言においては前章で見たように、一部の場面を除き主格にノが使用される。また、対格にはバが使われる。この性質を利用して主格を提示するか対象語ないし目的語を提示するかをめぐって論争の的となっているガの帰属を明確にできないものであろうか。

まず、対格の助詞バがどのように使用されるか検討してみよう。なお文法用語に統一のないものが多いが、混乱を避けるためにできるだけ一般的と思われるものに従うことにする。ここでも断りが無いものは初めに共通語の文をあげ、次にそれに対応する長崎方言の文をあげる。\*、?、??の記号は前と同じである。方言においても問題にしている助詞だけ片仮名を用いて表記し、他は共通語と同様の表記を用いる。長崎方言でバ使用が非文であればヲが使用されることになる。

- (1) 野菜ヲ切る。 (対象／目的)

野菜バ切る。

- (2) 駅ヲ出る。 (起点)  
 駅バ出る。
- (3) 学校ヲ卒業する。 (起点)  
 学校バ卒業する。
- (4) 道ヲ走る。 (通過場所)  
 道バ走る。
- (5) 辛い2年ヲ頑張り通した。 (継続時間)  
 辛い2年バ頑張り通した。
- (6) 山田さんヲ急がせる。 (使役)  
 山田さんバ急がせる。

対格助詞ヲといわれるものは長崎方言では総てバとなっている。

### 9.3. 共通語助詞ガの長崎方言による置換テスト

これまで見てきたように、助詞ガは長崎方言においていわゆる主格と認識されるときは一部の例外を除いてノが使用され、対格助詞と認識されるときはバが使用されることが分かった。一部の例外とは主格動詞のあとに名詞が位置して属格と紛らわしいときと、強い選択・特定機能を有するガの場合であった。これから長崎方言を試薬として、対象語・目的語を示すとされるガがはたして従来の学説通りなのかテストを行ってみよう。

#### a. 能力を表す形容詞、形容動詞

- (1) あの人は野球ガ上手だ。  
 あの人は野球ノ上手か。  
 \*あの人は野球バ上手か。
- (2) 私は数学ガ苦手だ。  
 私は数学ノ苦手か。  
 \*私は数学バ苦手か。
- (3) 舞の海は相撲ガうまい。  
 舞の海は相撲ノうまか。  
 \*舞の海は相撲バうまか。

このグループのガは長崎方言においてノを使用することから見て、総て主格と認識されていると言ってよさそうである。

#### b. 内部感情を表す形容詞、形容動詞

- (4) 私は相撲ガ好き。  
 ? 私は相撲ノ好き。  
 ? 私は相撲バ好き。
- (5) 私は肉ガきらい。  
 ? 私は肉ノきらい。  
 ? 私は肉バきらい。
- (6) 私は今車ガほしい。  
 私は今車ノほしか。  
 \* 私は今車バほしか。
- (7) 私は犬ガこわい。  
 私は犬ノこわか。  
 \* 私は犬バこわか。

このグループにおいてもノが優勢であるが、好き、きらいに関しては長崎方言の表現は普通上と異なる。共通語の「何が好き(／きらい)か。」といった選択・特定の用法では長崎方言においても「ナンガ好き?」「ナンガキライ?」が用いられ、前者には「相撲ガ好き。」、後者には「肉ガキライ。」のようにガを使用するのが普通である。選択・特定機能の強いガは通常、ノで置き換えないという規則が働くのであろう。

共通語において継続的な好みの表現として「好き」が使用される場合、長崎方言では動詞の已然相で用いるトルを使って状態性を明瞭にしたスイトルが使用され、「きらい」も同様にキラットルとなる。しかし、普通の「きらい」に相当する長崎方言は「すきでない」にあたるスカンが多用される。

(4)(5)をより方言らしい言い方で検討してみよう。

- (8) 私は相撲ガ好き。  
 \* 私は相撲ノすいとる。  
 私は相撲バすいとる。
- (9) 私は肉ガ好きではない。  
 ? 私は肉ノすかん。  
 ? 私は肉バすかん。
- (10) 山田さんは肉ガきらい。  
 \* 山田さんは肉ノきらっとる。  
 山田さんは肉バきらっとる。

(8)(10)は動詞「好く」「きらう」から出たと見るのが自然である。しかし、長崎方言では「すいトル」「きらっトル」が動詞からではなく「好き」「きらい」から派生したという意識が強い。したがって共通語においても、「好き」「きらい」には多分に「好く」「きらう」という動詞と隣り合わせの意識が働くのではあるまいか。(9)は会話では「私は肉ガすかん。」がもっとも普通で、文脈を設定するとこれには常に選択・特定の意識が働く場面しか想定できない。ガの使用は必然といえる。

#### c. 動詞＋タイ

「飲みたい」「作りたい」「見たい」「聞きたい」「したい」について検証してみる。

- (11) 今日はお茶ガ飲みたい。  
 今日はお茶ノ飲みたか。  
 今日はお茶バ飲みたか。
- (12) すしガ作りたい。  
 \*すしノ作りたか。  
 すしバ作りたか。
- (13) おもしろい映画が見たい。  
 ?おもしろか映画ノ見たか。  
 おもしろか映画バ見たか。
- (14) いい音楽が聞きたい。  
 ?よか音楽ノ聞きたか。  
 よか音楽バ聞きたか。
- (15) 明日は野球ガしたい。  
 ?明日は野球ノしたか。  
 明日は野球バしたか。

長崎方言では動詞＋タイに先行する助詞はバのほうがやや優勢である。これは対格をとる動詞の勢力がタイという形容詞化の助動詞の勢力より強く感じられるからであろう。したがってここでは共通語の助詞ガは主格よりむしろ動詞の対格要求により強く答えているのではあるまいか。これは共通語において動詞＋タイの前にヲが現れる現象と対応していると考えられる。

#### d. 可能を表す動詞

- (16) 山田さんは野球ガできる。

山田さんは野球ノできる。

\*山田さんは野球バできる。

(17) あの人は漢字ガ書ける。

あの人は漢字ノ書ける。

?あの人は漢字バ書ける。

(18) 一人で着物ガ着られた。

一人で着物ノ着られた。

一人で着物バ着られた。

(19) やっとびんのふたガ開けられた。

やっとびんのふたノ開けられた。

やっとびんのふたバ開けられた。

ノがやや優勢である。しかし、前述のように長崎方言では能力の表現にキルを使うのが普通である。(17)–(19)をキルによって検証してみよう。

(20)\*あの人は漢字ノ書ききる。

あの人は漢字バ書ききる。

(21)\*一人で着物ノ着きった。

一人で着物バ着きった。

(22)\*やっとびんのふたノ開けきった。

やっとびんのふたバ開けきった。

長崎方言～キルは共通語の「～ことができる」に似て動詞性が表面に出るものと考えられる。したがって対格バが要求されている。

e. 自意志によらない感覚動詞

(23) 山田さんは中国語ガわかる。

山田さんは中国語ノわかる。

\*山田さんは中国語バわかる。

(24) 変な音ガ聞こえる。

変か音ノ聞こえる。

\*変か音バ聞こえる。

(25) ここから雲仙ガ見える。

ここから雲仙ノ見える。

\*ここから雲仙バ見える。

このグループのガは総て主格として認識されていると考えられる。

## f. 所有、必要を表す動詞

(26) あの人は今日はお金ガある。

あの人は今日はお金ノある。

\*あの人は今日はお金バある。

(27) 本を読むのに眼鏡ガいる。

本を読むのに眼鏡ノいる。

\*本を読むのに眼鏡バいる。

以上、久野の分類に従って目的語を示すとされるガを長崎方言によって検証してみたが、時枝文法でガによって対象語をとる述語としてあげられたもののなかで、「望ましい」「恋しい」「はずかしい」「なつかしい」についても検証を加えてみよう。

(28) 明日のパーティーは正装ガ望ましい。

??明日のパーティーは正装ノ望ましか。

\*明日のパーティーは正装バ望ましか。

(29) 故郷ガ恋しい。

故郷ノ恋しか。

\*故郷バ恋しか。

(30) 昨日の失敗ガはずかしい。

昨日の失敗ノはずかしか。

\*昨日の失敗バはずかしか。

(31) あの町ガなつかしい。

あの町ノなつかしか。

\*あの町バナつかしか。

(28)で、長崎方言においてもガしかとらないのは、「望ましい」という語が強い選択・特定を要求しているからと考えられよう。(29)から(31)まで総てバを排除するのは、これらの形容詞は「好き」などと違って動詞性を内包せず、純然たる形容詞と意識されて主格のガを要求していると考えられる。

ここで(29)–(31)の形容詞に「～がる」を付けて動詞化し、長崎方言で調べてみよう。

(32)\* 故郷ノ恋しがる。

故郷バ恋しがる。

(33)\* 昨日の失敗ノはずかしがる。

昨日の失敗バはずかしがる。

(34)\*あの町ノなつかしがる。

あの町バナつかしがる。

動詞化された(32)から(34)が共通語でヲを要求するように、長崎方言においては排他的にバが出現する。このことは長崎方言のバと共通語のヲが極めて高い対応をなす証左ともなる。したがって対象語を示すと言われるガは述語の形容詞の動詞性が弱い場合、長崎方言でバをとらずにノとなることから、主格という意識で使用されているとすることができよう。

#### 9.4. 長崎方言ノ・バ置換が示唆するもの

以上のことから、時枝が対象語を提示するとし、久野が目的語をマークするとした助詞ガは、長崎方言のノ・バというフィルターを通してみると大半が主格のガという意識のもとに使用されていることが窺える。

ただし、「好き」「きれい」という形容動詞は長崎方言においては「～トル」という接尾辞が付いた動詞形で使用されることが多い。これは共通語においても「好き」「きれい」が動詞性を帯びたものとして意識されることを示唆している。その場合共通語助詞ガは対格にかなり近づくとと言える。だが、長崎方言でも「好き」「きれい」が使用されると、共通語同様ほとんどガをとる。「好き」「きれい」は選択・特定の文脈で使用されることが多いからであろう。

逆に、「書ける」などの可能動詞や「わかる」、所有の「ある」、「要る」「見える」「聞こえる」などは活用から見ると動詞ではあるが、長崎方言でノが共起しやすい点から見て、性質・状態を表す形容詞という意識で使用されていると考えられる。

一方、「～たい」によって形のうえで形容詞化した動詞は長崎方言においてバが優勢ながら、ノの共起も否定できないことから、動詞性と形容詞性を分ち難く共有していると言えよう。「ほしい」は英語において動詞 want であるせいか、目的語を要求すると思われがちであるが、長崎方言でのテストではノが使用されることから、「ほしい」の前の共通語助詞ガは一般の形容詞の場合と同じくいわゆる主格助詞とみてさしつかえなさそうである。

時枝文法で対象語をとる述語としてあげられた形容詞のうち「望ましい」は選択特定の主格助詞ガを要求し、「恋しい」「はずかしい」「なつかしい」はいずれも通常の形容詞と同じくガによって主格を提示していると言える。

## 10. 共通語助詞ガの機能

長崎方言の助詞ノとバを使用して、共通語の助詞ガの分析を試みてきた。それによると一般に主格助詞ガと言われてはいても、ガはいくつかの機能を受け持っていることが分かった。ここでもう一度まとめてみよう。

まず、長崎方言ノに置き換えられるガがある。これは述語の主体特定というガ本来の機能を有してはいるが、述語と一体といってもいいほど自己主張の弱いものである。次に、長崎方言と共通語に共有されるガが2種類ある。1つは例えば「りんごとみかんはどちらガおいしい。」のように比較した上で述語の主体の選択を要求したり、それに答えて「みかんガおいしい。」のように述語の主体を特定するガである。他の一つは属格との峻別の必要から使われるガである。後者は歴史的に同根であったノとガの機能分担が生じるうえで一つの契機となったと考えられる。

さらに前章で見たように「好き」「きれい」のような形容動詞はある程度動詞と意識される部分があり、その場合ガは多少対格に近いと言えよう。そして、そのような対格意識が「私はあのころ巨人の長嶋ヲ好きでした。」のようにヲ使用の言い方を生みだしているのであろう。「～ヲ好き」は必ずしも学校の英文和訳が作り出したとばかりは言えないのではあるまいか。

このように見てくると、主格助詞と言われるガであっても、かなり属格に近いものから対格に近いものまで様々である。そこで生じてくるのが、ガはたして格を表示しているのかという疑問である。

かつてガは主格で主語を示すという説が主流を占めていた。現在でも学校文法をはじめこの説の信奉者は多い。しかし、三上 章が諸種の著作で日本語から主語という用語を抹殺せよと説いて以来、日本語には英文法の主語に当たるものは存在しないという事実を認める人々が増えてきた。たとえば寺村秀夫(1978)は補語を学校英文法の補語とは別物と断った上で、「～ガ」は「(主格)補語」として補語の一つと考えていることを明言している。北原保雄(1981)もほぼ同じ立場から、主語と呼ばれているものは述語の補充成分に過ぎないと述べている。また時枝(1950)は三上より早く「主語は述語に対立するものではなくて、述語の中から抽出されたもの」と言い、「主語は述語の中に含まれ」「必要に応じて」「述語の表現を、更に詳細に、更に的確にする意図から生まれたと見るべき」ことを述べている。このように日本語における主語という用語は早くから疑いを受けていたわけである。



日本語で主語と言われてきたものを英語などの主語と同列に扱うことはできないという考えがかなり浸透し、主語と言われていたものは実は述部の中の補語の一つであるという見方が一勢力をなすほどになった。主語についての考えは大きく変化しようとしている。だが、日本語における主格その他の格という語はこれまでさほど疑問視されることはなかった。しかし、近年これにも様々な形で疑問が呈され始めている。たとえば仁田義雄（1993）は「表層の表現形式と意味的なレベルの存在である格が、必ずしも一対一の対応を示すわけではない」ことを前提として、格の「ゆらぎ」に着目しながら「主（おも）」「対象」「相方」などの用語を使って格を再構築しようとしている。

また山梨正明（1993）は深層レベルの意味役割すなわち「深層格」の位置づけを認知言語学の視点から考察し直している。その結果山梨は「格のカテゴリーの境界はファジーである」として格の「ゆらぎ」や「ゆれ」に着目し、従来の格の見方に新たな視点を導入している。

城田 俊（1993）は格助詞は「国文法が建設途上にあった時、手本となった洋文法の中で格とされているものにある程度対応する後置的小辞を便宜的に格助詞と名付けて選び出し、それが次第にかたまってきてしまった」可能性が高いと述べている。事実、山田孝雄（1908）には、他の名称を搜したが、適当な名称が得られなかったので英語・ドイツ語の翻訳である格という語をしばらくそのまま襲用するとある。山田は、西洋語の格は名詞の屈折を基礎として他の詞に対する関係を表すのに対し、日本語の格は「句成分の成立に関する意を示す」とその違いを述べている。山田は「しばらく」のつもりであったのだろうが、格という語はその後とうとう1世紀近くも借りっぱなしの状態、返却されるどころか始めから日本文法の本質であったかのような存在になっている。

通常、格は文中の語と語、特に述語との論理的関係を示すものとされている。「山田 松下 本 あげた」のように言語素材だけをならべたものに解釈を加えてみよう。

- (1) 山田ガ松下二本ヲあげた。
- (2) 山田ニ松下ガ本ヲあげた。
- (3) 山田ガ松下ノ本ヲあげた。
- (4) 山田ニ松下ノ本ヲあげた。

このとき、ガ、ニ、ヲ、ノは解釈を一つに固定する役割を果たしている。ここでガ、ニ、ヲ、ノは文中の素材をなしている語と述語の関係を示し、同時に語と語の論理関係も明らかにしている。それゆえにこの種の助詞は格助詞と名付けられるのであるが、そこには何ら疑問の余地はないのだろうか。

上の例で述語の「あげる」に着目すると、この動詞は本来、行為者・対象・授与される物を補語として要求するものである。このようなものに述語の必須補語と名付けると、述語によって必須補語はそれぞれ規定されていると言ってよい<sup>3)</sup>。今、「山田 京都 行った。」とだけ発話が行われたとしよう。これを誰も「山田ニ京都ガ行った。」や「山田デ京都ヲ行った。」などとは解釈しないであろう。それは「行った」という述語が必須補語として行為者、着点を要求することが暗黙に了解されているからである。

もう一度「山田 松下 本 あげた」を取り上げてみよう。これにしても、談話としてある文脈に置かれるとこのままで十分に意味が伝達されるのではあるまいか。もし「松下が誰に本をもらったか」が問題になっている場面であれば、誰も「山田ガ松下ニ本ヲあげた」という理解を示すであろう。

このように格は助詞によって示されるものではなく、述語によって内在的に規定されていると見るべきであろう。格助詞と言われているものは文中で省略が行われたり、語順が著しく普通と異なっても格関係が不明瞭にならないように補助的に使用されるのではあるまいか<sup>4)</sup>。

ここで本稿のテーマであるガに戻ることにしよう。助詞ガの本質的機能が英語などヨーロッパ系言語の主語に当たるものをマークするところにはないことは改めて強調する必要はないであろう。前述したように日本語にはそのような主語は存在しないのである。あるいは日本語はそのような言語ではないと言ったほうがいいであろうか。日本語で主語と言われているものは、述部の明瞭化のために述語の求めに応じる形で提示される補語の一つである。そのような補語のうち述語の主体ないし主体に準ずるものを提示する働きをもつのがガである。

ガの第一の任務は主格提示ではない。主格は述語によって既に規定されているのであり、必ずしもガがなくても主格は存在する。ガは主格の明瞭化を補助する助詞であって、ガが主格を規定しているのではない。前に見たように長崎方言において主格と言われているものは通常ノによってマークされる。そこでも排他的にガが使用され、助詞ガを共通語と共有するのは述語の主体

を比較、選択のうえで特定する必要があるときであった。ガの第一の機能はこのように述語の主体ないしそれに準ずるものの特定であり、明瞭化である。主格提示はガの二義的な機能である。主格は述語の補語として本来存在するものであって、ガはそのような主格の明瞭化を補助する働きをするにすぎない。そうでなければ格助詞に後接する次のようなガの説明はできない。

- (5) 釣りは海でガおもしろい。
- (6) 招待客は福岡からガまだ来ていない。
- (7) 関西はほとんど回ったのに、君のいる肝心の姫路にガまだ行っていない。
- (8) きのは多くの人と碁をうったのに、一番うちたかった山田さんとガうてなくて残念だった。

総てガの選択特定機能であろう。長崎市周辺の一部、茂木地区などにはこのようなガの特定機能に根ざしたものと考えられる次のような表現がある。

- (9) A：なんしガ行きよっと？  
B：シャツば買いガ行きよっと。
- (10) A：なんしガ来たと？  
B：ごはんば食べガ来たと。

助詞ニに代わるものである。強く特定したいという意識がガを使用させるものと思われる。ガの機能の本質を示唆してはいまいか。

## 11. おわりに

格助詞と言われている助詞ガを、共通語のガの位置に来る長崎方言のノ、ガ、バの使用を通して分析を試みた。その結果、ガの第一の機能は述語が補語の一つとして要求する主体の特定であるという結論に達した。そして、そのような特定機能が補語のなかの主格を明瞭化する上で利用されていると言える。

また、従来主格か対象語格か目的語表示かで問題になってきた「～ガ好き」「～ガできる」「～ガ見える」などのガは長崎方言を試薬としたテストでは大半が主格を表すとされるガと同根であることが分かった。しかし、これもガの第一の機能が補語のなかの主体の特定であることを考えると、さほど大きな問題ではないといえる。

問題はこのようなガを日本語学習者にいかに説明するかである。言うまで

もなく、最も優れた教授法は学習者に何の疑問も抱かせず、子供が母語を習得するように自然に日本語を習得させることである。しかし、それは成人の学習者にはほぼ不可能である。そこで質問があった場合は文法的な説明が必要となってくる。知的レベルは高くても母語を言語学的に分析した経験もない学習者に国際語になりかけている英語などと異なる文法を説明するのはかなりの時間と困難を要するものと考えられる。コミュニケーションだけが目標の学習者には時間の浪費にしか映らないであろう。助詞ガの分析はかなり進んできたが、まだ明快で効率的な教えかたはない。今回も新たな視点からガの分析を行い、それなりの成果はあったと考えるが、残念ながらガの有効な教えかたに結び付けることはできなかった。ただ、結果的に長崎方言で主格助詞と言われているノの使用不使用のルールが明確になり、長崎方言を教える必要があるとき有用であると考えられる。

今回の試みから、方言を単に方言学の分野だけにとどめることなく、これまで説明的未知とされている語句や表現の解析に活用することを提唱したい。事象を言語で表現するときの認知の方法には方言も共通語も変わりはないはずであるから、各地の方言を日本語の分析に活用することで日本語に潜む未知の解明とそれを利用したよりよい教えかたが開発されるものと信じている。

#### <注>

- 1) 『最新日本語読本』(新潮社、1992、4)の吉岡 忍「コミュニケーション・ジャパニーズ」による。
- 2) 国広哲弥『意味論の方法』(大修館書店、1982)の中の言葉で、未習の外国語のように意味も用法も分からない未知すなわち「実体的未知」と対比して使用されている。
- 3) 仁田義雄(1993)における共演成分と類似した概念である。
- 4) 「開く」と「開ける」、「壊れる」と「壊す」など日本語には煩瑣なほど対になる自動詞・他動詞があるが、これも動詞による必須補語の規定、すなわち格の規定に寄与していると考えられる。会話において助詞の省略によっても文意が伝達できるのは助詞が一義的に格の規定に参加していないからであろう。また、外国人の助詞の省略が不自然な日本語に聞こえる場合は、必須補語でない語の助詞を省略したか、文脈上格の明確化に必要とされている助詞まで省略したことが原因の一つと考えられる。

参考文献

- 上村孝二 (1983) 「九州方言の概説」『講座方言学9 九州地方の方言』国書刊行会
- 神部宏泰 (1969) 「九州方言の総括的解説 文法」『九州方言の基礎的研究改訂版』九州方言学会編、風間書房 (1991改訂版)
- 北原保雄 (1981) 『日本語の文法』中央公論社
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 柴田 武 (1988) 『方言論』平凡社
- (1995) 『日本語はおもしろい』岩波書店
- 城田 俊 (1993) 「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐる』仁田義雄編、くろしお出版
- 田尻英三 (1992) 「日本語教師と方言」『日本語教育』76号
- ダニエル・ロング (1992) 「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』76号
- 田野村忠温 (1993) 「「のだ」の機能」『日本語学』1993. 10、明治書院
- 寺村秀夫 (1978) 『日本語の文法 (上)』国立国語研究所編、大蔵省印刷局
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語篇』岩波書店
- 西村 宏 (1969) 「九州方言の各県別解説 長崎」『九州方言の基礎的研究改訂版』九州方言学会編、風間書房 (1991改訂版)
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐる』仁田義雄編、くろしお出版
- 萩野貞樹 (1993) 「国語表現における「の」の指導」—「妻の用意した食卓」を待望する—『日本語学』1993. 10、明治書院
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 備前 徹 (1993) 「日本語教育における方言」『方言と日本語教育』国立国語研究所編、大蔵省印刷局
- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム—」『日本語の格をめぐる』仁田義雄編、くろしお出版
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館 (1970復刻)

(外国人留学生指導センター日本語コース委嘱講師・  
長崎ウエスレヤン短期大学非常勤講師)